
ヴィヴィオのX'masプレゼント

サラマンド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴィヴィオのX・masプレゼント

【Nコード】

N7248P

【作者名】

サラマンド

【あらすじ】

機動六課のクリスマスパーティーで買い出しに行っているニールを待つのはとヴィヴィオ。そのヴィヴィオは何故か元気がない。深緑の狙撃手VS赤き傭兵の本編後の番外編です。

（前書き）

一応説明しますと、時間軸はなのは（サンライト）ルートのJS事件後で機動六課がまだ運用期間中のところですよ。

―12月

機動六課の隊舎には雪が降り積もり、辺り一面が白銀の世界と化していた。

その隊舎の中で今、クリスマスパーティーが催されていた。

大食いもいるため、ケーキもピザもパスタも大量に用意されている。そうして盛り上がっている中で、ヴィヴィオはなのはとフェイトと一緒にテーブルで座っていた。ただし、浮かない顔で会場の出入り口を見ながら。

「どうしたの、ヴィヴィオ。」

養子、いや、自分たちの子供であるヴィヴィオを気にするのは。

「パパ、早く帰ってこないかな？」

だがなのはもヴィヴィオもパパ…ニール・ディランデイがここにいない理由は分かっている。

彼は今、飲み物が足りないということを買出しに出掛けている。

二人ともこの場にニールが帰っていることを心待ちにしているので

ある。

の다가… ヴィヴィオが浮かない顔をしているのはそれだけではない。
ヴィヴィオはニールにプレゼントをねだったことを我が儘が過ぎた
と思い、落ち込んでいるのだ。

なのはとフェイトはそんなことはないと言めるも、ヴィヴィオは未
だに気にしていた。

1時間待ったが、未だに現れず、ヴィヴィオはいてもたってもいら
れず隊舎の入り口で待つことにした。

「ヴィヴィオ、ここにいたら風邪引いちゃうよ?」

後ろからカップを2つお盆に載せたなのはがやってきた。

「はい、キャラメルミルク。」

近くにあるテーブルに置き、ヴィヴィオにキャラメルミルクの入っ
たカップを渡す。

「ママ、ありがとう。」

ヴィヴィオはお礼を言つも、元気がない。

「まだ我が儘言ったこと、気にしてる？」

ヴィヴィオはなのはの言葉にキャラメルミルクを一口飲んでうんと頷く。

普段なら甘くて美味しくて暖まるのに、何故か何か物足りなさを感じてしまう。

「パパは一生懸命私を助けて、パパになってくれて、それだけで十分なのに我が儘なんて…言っていないのかな…。」

なのはは内心、思った通りだと確信を得るが、口には出さない。

「…ヴィヴィオ、私もニールも、ヴィヴィオにもっと色んなことを楽しんで…学んで欲しいと思っているの。」

その言葉の裏には、二人が色んなことを楽しむより早く、組織に入って戦ってきたという過去が関係している。

なのはは9才から魔法に関わり、ジュエルシードや闇の書などロス・トロギアが関わった事件の関わりと後の時空管理局入りで二つの事件後で重傷を負って、二度と飛べなくなる危機に陥ったこともあって友達と遊ぶ時間がほとんど取れなくなった。

ニールは、テロで家族を亡くし、スナイパーという暗殺稼業を経てソレスタルビーイングのガンダムマイスターとなった。到底遊んだり色んなことを楽しむことはなかった。

二人とも、自分の娘であるヴィヴィオには自分たちが出来なかったことをやれるようにしたい、もっと色んなことを楽しんで学べる環境を創りたいと思っている。

「だから、そういう我が儘は言ってもいいんだよ。」

「そうだが、そういうことは我慢なくていいんだ。」

となのはがヴィヴィオを諭していたところで、ニールが隊舎に入ってきていた。

「ニールパパ!？」

「お帰りニール。ちょっと遅いよ?」

「ただいま。悪い、思ったより渋滞してて立ち往生になっちまってな。まあ、それだけじゃないんだが。」

ニールはしゃがんで持っていたペットボトルなどが入った手提げ式の大きな紙袋から正方形のヴィヴィオの頭ぐらいの大きさの箱を取り出した。

その箱にはクリスマスプレゼント用に赤と緑のラインの入った包装が為されている。

「パパ、もしかして...。」

ヴィヴィオは少し困惑しながらもプレゼントを受け取る。

「開けてみて、ヴィヴィオ。」

ヴィヴィオは包装を丁寧に取り、箱を開けて見る。

「わあ…可愛い！」

箱の中には…前から欲しがっていた白いテディベアだった。

「俺もなのと同じ考えた。我慢する事自体は悪くないが、我慢ばかりされたら逆に俺たちも辛い。だからある程度我が儘も言っていんだぜ？という訳でヴィヴィオ、メリークリスマス！」

「メリークリスマス！！」

突然、二人がしんみりとした雰囲気を変えたことで呆気に取られたヴィヴィオだったが、何だかそんな二人を見て悩んでいたことが嘘みたいに吹き飛んだ。

「うん、メリークリスマス！ありがとう、ニールパパ、なのはママ！！」

そこには三人の小さくも暖かい幸せがあった。

（後書き）

深緑の狙撃手VS赤き傭兵関連の更新は久々ですが、フェイトルー
トの更新になっていないことは申し開きのしようもありません。

なお、敢えて短編にしたのは長編に更新すると更新したのが分かり
づらいからです。

ただ、クリスマス終わった後の更新になってしまったのは悔やまれ
ます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7248p/>

ヴィヴィオのX'masプレゼント

2010年12月30日19時07分発行